“兵への道”を訊く座談会[[1]](#footnote-1)

兵の令が降つた。あゝ遂に兵の令が發された。日韓併合以來卅三年の長きにわたつて、われら二千四百萬が日生活の目標とし忠の□現とした兵制は遂に布かれたのだ。最早われわれは何の躊もなく大の御として一路するのみであるが、兵は高なる日本精神の所者でなくてはならず、はの遂行にする盡忠のでなくてはならない。では、十九年度施行をつてわれわれは如何に鍛し生活しすべきか――これに應へるため本では十二日、、、各の代表者を本にいて兵實施に對する青年、年及びその母の進むべき道を訊く會をした。

出席者

海田陸軍大佐（志願兵訓練所長）大久保陸軍中佐（京城師團）八木信雄氏（本府警務課長）香山光郎氏（作家）夏山茂氏（鍾路區警防團長）鈴木清弘君（朝鮮航空會社員）高山□君（丁字屋店員）洪夫人（李侯爵夫人）宮村淑鍾女史（誠信家政女学校々長）

本社側　嶋元編集局長　大津社會部長

一　義務を超えた光榮――この氣持こそ皇軍の眞髓だ

大津　　さん、おたせしました、今からこの度發されました兵制度につきまして各方のある方々のお話をひたいとひます。として私の方の長嶋元さんに司會をおひしたいとひますから御承ひます。

嶋元　　今日はおしいところうじます。愈よ私がしてゐました兵制度が昭和十九年から實施されることになりまして、二千四百萬半大は今こそ本當に皇國として生き行くの光榮をへられるでありますと同時に、今こそ二千四百萬半大が眞に皇國として生きるべく眞の日本人への成との大きな道が開かれたとひます。それにつきまして、このびが天のびに終つたならばそれこそ取返しのつかないことがりませうし、又兵制度といふものを一つの利であるやうにするやうな事はじて許されません。日本の兵制度といふものは國にない日本のみにある々國にりました光榮ある對のであるといふ、このことを本當に半の大に大いにしてそこから皇國であるといふことをしてゆかなければならぬのであります。つきましては今日はそのに當られる八木さん、兵の成、成に一意心されてをられる海田大、それから直の方に關のある大中、そのの方々におひし、又半側の力な者として山、山さんに来ていただきました。眞の人精神を發しまして立な手を立てて行くには必ず母の大な力があるのであります。今度の大東においても日本の母は九神を生んでをるのであります。こゝにこそ大にしてい日本の母があるのであります。これから本當に日本の人を生みてて行かねばならない、その半のお母さん達はから如何に行くべきか、そのお話をくためにご人お二方をおひしました。青年の心からの叫びを聞きたいとひましてお二人をお願ひしたのであります。さういふ立場から今日はしいお話でなく本當にけた氣持でさんにお話をしていたならば幸ひだとひます。先づ兵制度が發表されまして、これに對しどういふがあつたかといふことはに私の新で取り上げてをりますが、さういふ表面的なものではなく都會の隅々、または農村の隅々に至るまで青年や或は父兄、婦人の方方にどういふがあつたかといふことにつきましてどうぞ夏山さんから。

夏山　　私は今度の發表を聞きました時には物も言へない程感激したのであります。私は初め新聞社の方が警防團の訓練をやつてゐます私のところに知らしてくれたのであります。實に愉快でありました。その感激と申しますのは、併合卅有餘年間色々紆余曲折はあつたのでありますが、日本の朝鮮統治は全く成功致して朝鮮の民衆が向ふべき目標がはつきり決まつてゐた、殊に今回は徴兵制の施行により半島民衆が内地の同胞と同様の　天皇陛下に御奉公申上げる機會を與へられた、このことを考へます時には全く半島の民衆は眞に名實共に皇國臣民になれたのだと言ふことで全く感激したのでありました。これまでには色々な事件もありましたが、この制度は決して政策的に施されたものではありません。日本の軍隊は世界無二のものである、さう言ふ皇軍の中に朝鮮人を加へて頂くといふことは決して政策的のものが加味さるべきものでない、精兵、強兵として送り出さなければならん、その兵隊を朝鮮民衆から採ると言ふことはこれは皇恩の廣大無邊を示されるもので眞に名實共に我々は皇國臣民であると言ふことになつたのであります。總督閣下のお話のやうに十億の東亞の民衆を指導する中核は日本人である。その日本人は誰かと言へば即ち内地人と朝鮮人を合したこの日本人である。

この朝に兵制度が實施されたと言ふことは取りも直さずそのをへられたことにもなると言ふお話がありました。全くこゝにこの會を得ましたことを私はすると同時にににへます。朝のはよくなりつつある。大正八年のやうなな不事もありますが、その後朝のと言ふものは、はつきり日本の皇道精神といふものを握することが出來、よくなりつゝあつたのであります。今日では半の行くべき道ははつきりと決まつて朝人は日本人になり切る以外に道はないといふことをはつきり知つてゐます。特のものをく全のものはさう信してゐます。この朝の眞相をお上からよく見てきまして、この制度が實施されるに至つたことはにであります。なほ先も長からお話があつたやうに動もするとこれを利といふやうにへるものがあつてはいけないといふ心であります。よく朝に兵制度を要望した中の中には眞に國家のために御奉するために要したものではなく朝にさういふ利を得するために主張した人間が一部にはないとはいへません。過去のからいつてな分子はさうへるかもしれません。また一にはこのをたすことになつたのだから當然これにふ利があるとするものもあるかも知れません。これは利とか義の問ではありません、國として　天皇陛下に御奉申上げることの出來るさと光榮、これをはねばなりません。これについて若し間つたへ方を持つてゐる者がありとすれば、お互が力すべきであると考へます。その次は後で夫人のさんからお話があるとひますが、男子の方はこのことについては相當が出來てゐますが母のへ方はまだまだ及ばざるところがあるやうにへてゐます。これがためにこの制度が實施されまして皇國の一人として國家に御奉する會をへられたにも拘らず、その家全がさういつた氣持にならないで、いやいやながらそれにして行くといふことではいけない。

半島の家庭においてはややもするとお母さんの方がさういふ氣持になりはしないかと思ひます。近來朝鮮の婦人啓蒙運動は非常に活發になりましたのでさう言ふことは解消すると思ひますが、實施まで二年の餘裕しかないのでその間に母親に喜んで御奉公するやう認識させることが必要です。

嶋元　　香山さん、インテリ方面は如何ですか。

香山　　私の所に訪ねて來た必ずしも時局的の人間ではなかつた二人の若者に對し、君達は何う思つたと聞いたら非常に喜んでゐました。若い者達のこれは僞らない言葉だと思ひます。所謂案じるより生むが易いといふ通りで誠にやつて見れば案じることはないと思ひます。青年達インテリ階級に對する心配はないと思ひます。眞に皇國臣民になり切つて國に力を盡していけば、行く行くは三大義務の最後の義務を賜るのだといふ氣持は奬勵してもよいと思ひます。それを今度の發布に結びつけて當然のものだと考へることはいけません。さういふものは夏山さんのお話のやうにやつつけることがよいと思ひます。お前達朝鮮の子供でも忠義を盡せば大將にもなれるといふやうな希望を持たせることは非常によいのではないかと思ひます。然しそれをこちらから要求するという氣持は悪ひと思ひます。昭和十三年に志願兵制度が布かれましたが、之は今から考へますと試驗であつた。その試驗に及第したやうなものだと思ひます。それによつて光榮ある義務を授かつたものであると考へてゐます。其は國民として十分忠義を盡す、それで最後の義務を賜るのだといふ考え方はよいのではないかと考へます。（1942年5月14日）

二　體格だけでは駄目　三千年の強さを識れ

嶋元　　八木さん、それについて

八木　　本當に皇國になり切つてしまへば陸大將にもなれるといふことでなければ内一でない、さういふ大きなといひますか、皇國となりうるやうな心へで力して行くことが必要だと思ひます。兵制度が出來た、その代として求めるといつたへ方は斷じていけません。何處までも々日本國といふものは只管人とか、とかいふことでなく、陛下の御爲の在である、國家の爲の在だといふ[氣持で]として自分のむべき道を只管にいていけば、そこに國として　陛下からるものはそれにつて來るとへられます。半の人々が前に光明を持つて、本當に皇國としての力さを持つて行くことはよいこととひます。代をめるがためにやるというへ方は對にいけません。

香山　　徴兵制度の出ない前ですが、二三の大學生達に話を聞いたのでありますが、その人達は餘り思想の穩健でない人達でありますが、その人達は日本が本當に朝鮮人を内地人と同様にしてくれるのは何時のことだか判りはしないと言ふことを言つたので、私は信ずる、斷じて信ずる、日本は　天皇陛下のおつしやつたことが變るやうな國ではない、變つたらたいへんだ、　天皇陛下は御詔勅を發せられて申されたのであるから絶對に變ることはないと答へた。その後この學生に會つて、今回徴兵制が敷かれる事となつた、これでも君達は信じないかと言つたら、信じます、徴兵制が出來ました以上信じますと答へてゐました。かう言ふ譯でありますから信ずることが必要である、只御奉公することが日本國民の光榮ある務であると言ふことをインテリ階級の人は知つてゐます。只本當にさうなるのかならぬのかと言ふ疑點が最後に殘つてゐたので、それさへ解ければ問題はないのであります。今はそれが解けたのです。

八木　　当局としては徴兵制度が布かれなくてもさういふ方向に向かつて一生懸命に持つて行かうとしてやつておつたのであります。それが理解されなかつたのであります。

香山　　それが知識階級の人たちに□然としてゐなかつた。所謂凡人に屬するものでありませう。（笑聲）

嶋元　　海田さん、兵の成といふ事が各方に非にを及ぼしてゐますが、あそこまで持つて行くには大な心があつた事とひます。これは今後の青年への大きなとへますので、そのをどうぞ。

海田　　昭和十三年にこの制度が出來た時に、こんな大が私に負はされた、私はそんなではないけれど、におけしたのであります。然しその當時はどうしてこれをするかといふ目標に心しました。私も半の歴史にめてうといし、半青年の心を知る會もなかつたので、實はその當時はどうしてやつていくかと毎日不安で日を送つてをつたやうなで、然し何時まで不安で日を送つてをつたところで仕方ないので、何んとかしなければならんといふので、ご承知のやうに昭和十三年の六月から大法科のを借りてめたのであります。さて實地に取りかゝつて最の日は員が初対ので、名刺を以て私は斯ういふものでどうかしくといふやうな末で、どの人がどんな氣持を持つてゐるのか、どれだけのを持つてをられるのか全く判らない。斯ういふ大きな仕事といふものは員といふものが渾然一となつ[て]やらなければ出來ない。そこで全員が渾然一となつて一の魂となつて青年とぶつからうといふのでめた。これで六月から十一月やつたが、自分ながらどんなになるかをるやうであつた。幸ひ入つて來た青年は非な氣魄とを持つてび込んで來た。その後に入つて來たもの[と]べて、非によかつた。このと力で十分の成をげてくれたことと思ふ。幸にさういふ選りだつたので、第一回の生は無事にしてに送ることになつた。さてに入つて、十分兵隊としての成績を舉げることが出來るだらうかといふことが不安でならなかつた。我々の手を離れて軍に入つて相當の成をげてゐるといふことをいてやつと責を除されたやうな氣がしました。然し當時は丁度事で兵を場にやらなければなりません。〇〇は北支に出動してゐましたから兵出も出動をぜられた。この時御承知のやうに會に行會をした。兵は年のがつて非にんでをつた。私の心は場で十分な御の實をげてくれるやうにといふ考へで一パイであつた。愈よ明日は出發という時に一同を集めて車坐になつて『んでんで歸れ』といふことをいつたのです。そのの等の度は立派なもので、起立してをひしばつて、い決意を以て『必ずお葉通りやつて歸ります』と同に申しました。それで安心したのであります。又當時の所長であつた鹽原學長はそれこそ夜一もせず日ののに長と書かれた國を一人々々にされた。あれをふと無のものがあります。その後の事は御社の紙上にも發表されてゐますが、仁錫が眞先にを遂げ、或日十數名のを出したのでありますが、何れもをして立に場において内地の丁と伍して何等色がないといふことを聞いて私は重荷を降ろしたやうな氣がした。それからずっと今日まで、御承知の通り本年は二十五萬の者がしてゐまして、そこで今年は四千五百人を採ることに新紙上に發表せられて、非に家のため心いものをずるのであります。

嶋元　　志願兵はあの發表を聞いてどう言ふ事を言つてゐます。

海田　　内地の全國協和會主任の講習會があつて、それに出席して歸つて來た許りで十一日一寸訓練所に行きました。まだ直接に生徒に會つてゐませんので精しいことは知りませんが、職員から聞いたところによると、突然今回徴兵制度が發表せられて眞に内鮮一體、一視同仁の大御心を拜し、その宏大無邊の有難さに何とも言いやうがない、我々のやうなものが言葉に現すことが出來ない、これも第一期から八期までの先輩が軍隊に入つて相當の成績を舉げた、その實績が認められたと言ふ大きな原因があるだらう、我々も先輩に劣らないやうに、近く卒業したならば確り頑張つて御奉公しなければならんと言つてゐます。

嶋元　　街や部落には喜びが色色の形で現れてゐますが、その色色の喜びに對し一つ軍の立場から。

大久保　　街の喜びといふもの、民間の喜びは直接徴兵に當るものに特に大きな拍車をかけると言ふ結果になると思ひ、非常に愉快に思ふのであります。朝鮮に徴兵制が布かれて日本の實力と言ふものは相當強くなつて來ると言ふことは非常な喜びで、固より日本としては頭數ばかり揃つて兵力が多くなつたという言ふことを望んでゐるのではない、頭數なんかいくら多くても烏合の衆では何んの役にも立たない。印度兵、マレー兵と言ふものを見るとよく判ります。さういふものは日本では期待しない。盡忠報國の上から戰闘の苦労に耐へ得る立派な軍隊でなければ戰爭に勝てない。

朝に兵制が施行されたといふことは、朝に對して當が信を持つて大な信をかけるに至つた、内地人とらないやうに精兵として役に立つといふ信を持つたといふことをするものである。その信されたといふびが今れてゐるのだらうと思ふ。それで々の特にずることは、これだけの信をかけて、これだけの大を行つた以上は、非ともその信にかぬやうな實をげなければならん、くも當のなり信が間つてをつた、つてをつたといふやうなことがあつたとすれば、それこそお上に對して申がない。取返しのつかん問である。先づさういふことは対にないと今日でははれてゐますが。先き程お話したやうに、全般に内一の實が顕になつたといふこと許りでなく、兵の成を見ても現に第一でいて來たものを見ても、内地人としもらんといふ事實がに明してゐる。それで信を持ち得るやうになつたのであります。しかし何といつても兵令によつて全から兵隊をるとなると兵のやうに自らしたその中からごくかなものを選びいて來たものよりしが落ちるかも知れないといふやうなこともへられぬでもないのです。そのにおいては一般にであつたといふやうに見られてゐますが、日本の兵のさといふものは科学なものでなく二千年來の日本精神である。その精神なによつてがつてゐるといふものはに支事においてもりなしと見られてゐます。全般になると分そこにせられる地があるのではないか、さういふ方にはこれから先、大にを要するのではないかといふことがへられます。もとよりこれに對して非な決心と心を起してゐるとひますが、この會に今までにない立な精神要が活用されて來るとふ。に周から國全般の意を大いに煽り立てる、その方に大いに車をかけることが必要であります。な問として國をもつと及しなければならんとか、事を大いにやらなければならんといふこともありますが、これ等の要といふものは要するに本になる精神要を愈よする、このをまで盡忠報國の精神をするといふことを疎かにしたならば、それは大なことになるとふ。大今日までの日本ののといふものも、よりの立な精神はに持つてゐるけれども、然しそれに愈よきをかけて發しなければならんといふので、のての目はこのに重がおかれてゐるのであります。この問は新しい問ではないが、に積に要[求]されてゐるのであります。愈よ本令がかれることになつたのは、こゝに内一の實が動かす[ベ]からざるところに達したといふことをするもので、々としても何んともいへぬ力さをえたである。これからはての方においてこの氣持が愈よめられて行くのではないかとふ。（1942年5月15日）

三　母は誇れ“子は國の寶”

大津　　海田さん、所の生を育てたを通してこれからの丁の心へをお願ひします。

海田　　今後この期間に半の者として、或は青年自らとしても、どんな心へをして行くかといふ事について、この期間に實實行が必要であるとふ。といふのは所の過のから見てもれた代表青年が來ただけに相當立なことを口ではどんどんいふ。併しながらそのいつた事を何に實行するかといふことを一歩込んで訊いて見ると、なかなかそれが立所に出ない。へていふとこの間内地にがあつた。そのからして此處に一つの夷が落ちた、もに人はいない、たゞ一人をつて、圖愚圖してをつたらこの室はけてしまふ、どうするかといふ實問をへても、その答へは實でなければならぬのにで答へる、禪に終る。どうも實行といふもの[と]大分れたことをいつてゐる。從つて一國に報ずるとか、或は張るとか、或は責をすといふことは立に青年が答へるけれども、どうする事が責をしたのか、どうしたことが張つたのか、或はどうしたことが一國にじたのか、禪に終つて實行とかけれてゐるやうなことが、過去の所の話においてもよく現れて來る。だから今後この半の者なりにみ又青年その人にむ事は、日々の生活を通して、斯うすることが今日この事件にかつて國にずる手だ、或は今日この仕事を斯うやることが責をやりをふしたことだ、或はこの仕事に對してこゝまで斯うやつてく事が物を張り通した、或は大東をどこまでもひくといふやり方だといふ、日々の生活を通しての責をし切るとか、或は物を不にやりをふすとか、或は国のためにんで務のためにれるといふことは、朝からまでの仕事に絶えず出て來ることだらうとふ。

それを終始實物について口でなく實行で現れるやうに指導しなければ役に立たぬだらうと思ふ。さういふ點はこの準備期間にしつかりと、期せずして實行の上に現れるやうに指導するのが準備ぢやないか。もう一つは物の考へ方を、どうもともすれば若い人の一部分には自分といふものを中心に、又自己を立脚点として物を眺める、さうして斯うすることは自分のためになるかとか、或は自分にどういふ影響が來るかといふ、その物の考へ方なり判斷といふものが常に自分を基調として物をいつて來る。今後の生活の上に於て常に若い人が考へねばならぬことは、國家といふことを中心に、一つの仕事に打突かつて、この仕事をして行つたならば、それがどれだけ國家のお役に立つか、お役に立つには自分は如何にして行つたら宜いか、物を考へ、また手段を講じて置かなければ、どうしても一死君国に準ずるといふ具体的のものが現はれて來ぬだらうと思ふ。これは如何にも分り切つたことを要望するやうでありますけれども、訓練所の過去數年間の經驗から、この準備期間に、有頂天に喜び、有難い、感激に堪へないといふことだけでなくして、いざこれが實施といふ時にはどの青年をつかまへても充分に實績が舉るやうに訓練して置く事柄が、今度の徴兵制を布かれた一つの恩典に報ゆる途だと思ふ。

嶋元　　山さんから御人のことについてお話がありましたが、今んに人の動が起つてゐますが。

宮村　　今度のこのなの實をげる責者は先づ母ではないかとひます。この責は學校であると思ひます。學校の問を別にしてへられない、り學校とお母さんではないかとひます。この發を知つた瞬間私は男の子を持つたお母さんをひ出しました。々としたにえたお母さん達。ての人のと地を高めなければならん、これこそ本當に人蒙動を眞にへねばならんと、つくづくじました。それには先づ家生活をよくして行く、さういふことをへ、又現在人の弱さをへます時に、學校の内をもつと科学にめて行くといふことが必要ではないかとへます。今後は子をいふものを國の寶として取りふといふ風な氣持を持たせるやうにしなければなりません。さうして本當の人の母とならなければならんとつてゐます。

大津　　さんは男を人お持ちですか。

洪　　　一人は京中學校、1人は國學校三年であります。

大津　　それでどういふ風にてゝ行こうかといふのをかしてくれませんか。

洪　　　この度の兵制度發については二千四百萬のものは大御心のさにしないものはありません。これこそ私達二千四百萬のものが一人殘らず本當の皇國として見てけるといふしさにしないものはないだらうとひます。然し私は一番先に心になつたのは、朝の母といふものは子を慈しみてることには何れの國の母にもらないのでありますけれど、といふにおいて、ずつとおくれてをるといふことは事實ではないかとひます。それに今は子をてるのは母のである、責であるといふ氣持、心掛は持つてゐなかつたと、斯う申しても差支へないのではないかとひます。今までの兵におきましても、本人は行きたいとして父や祖父が許しても、家の中で母が々許さないといふことをきましたので、私が地方を廻ります時には、なるべく兵制度の本精神を説き、そのつたへを直させやうと力して參りました。然し本當に地方を廻つて見ますと張りそれをばない、その一つは朝には昔からといふものが御いませんでした。

從つてそれに對する理解が足りなかつたために、只戰と言ふものは恐いものだ、軍人になれば命はないものだと言ふ風に考へてをつたのであります。さう言ふ譯でありますから、まだ國民の義務とか又責任とか言ふことは、まだ理解してをらなかつたやうに思ひます。それにしてもあと二年で徴兵が實施されますので、本當に軍国の母にならなければなりません。この半島婦人の本質から言へば、總ての教養、常識と言ふものが足らないといふことは事實で、この人達を如何にして導きその子供を育て上げて本當に皇軍[と]して恥しくない軍人に育てるかと言ふことが一番問題ではないかと思ひます。青年そのものについては決してその素質からまた體質からいつても恥しくないものと思つてゐますけれども、母だけは再教育するのが急務だと思ひます。今までは子供を育てれば[よかつたが]、その子供が本當に國に盡す　天皇陛下に盡すと言ふその精神的教育、本当の日本人を作るといふ自覺が半島の婦人に大切です。それでなくともこの時局柄、銃後婦人として日本婦人として[自己]認識[し、]出來るだけの力がなければならんと言ふことで半島婦人の啓蒙が叫ばれてゐる今日、この徴兵制度で婦人の責任は一層重くなつたのでありますから、今後は軍人の母として恥しくないやう目醒まして參るやうに、又おくれてゐる人達を指導して行くといふことが必要と思つてゐます。

大津　　徴兵制度が發布された時に、貴女は子供さん方にどう言ふ風に説明されましたか。

洪　　　子供が先に學校から歸つて申しました。私はその時新がまだ參りませんのでりませんでしたが、子供は『お母さん、朝にも兵制度が出來ました』『さうですか』といつて一寸二人とも無でゐました。元來長男は學校に行くのだとしてゐますので、子供ののほどは讀みとれました。

香山　　私の内のもので一人を持つてゐる者があります。知でありますが、一人子ですから非に大事にしてゐます。子供は兵のところにに行きたいと申してゐるので、私が母に子供が行くといふのならやつたらと申すと、母は大つて何うしてもきませんでした。ところが九日のあの發を見ると非にんでゐまして本當にばしいと張切つてゐますので、つたのですかとくと、かしいうな顔をしてそはそはしながらもこれで兵さんのになれるとふとばしいといつて、御をつてんでゐました。さうしたですから母もいざといふ場合になれば氣持がすつかりるのでありますから、母に對する心、さうむつかしいものではないとつてゐます。（1942年5月16日）

(完)軍神になる目標を摑め

嶋元　　母の問ですが、この大分のお母さんは農村です。從つて度がいとひますが、昨年農報國の青年の話にあつた[が、]朝の母も内地の家を見つてひたいといふ。どういふことかとくと、私は内地に行つて農家で話になつたが、とても子を大事にしてゐる。や躾など起居動作については相當しいけれども非に大事にする。朝の母もる時はり、がる時はがるが、大事にすることとがることとはふ。朝の家でも農村家でも子を大事にしてくれたらよいとふといつてゐましたが、人動もさういふことから入つて行かなければならんとへます。

宮村　全くさうなくてはなりません。人のの問もさういつたところから入るべきで、それと同時にを明にして、子は國にされるものといふを付けなければなりません。

夏山　　山さんのお話にもありましたが、先日私がのをいて歸る中□□燮といふ人に會ひました。その時の話です。その人は二人の男子があります。今までお母さんは兵になることには對してゐた。それが今度の發で『朝も愈よ兵さんが出來ますね』とまるで定してゐたかのやうにんでゐたといふのですが、さうして見ると愈よ[と]なるとさうしたものでもないとひます。は大きな力、した大きな力のせいではないかとひます。子供にへるにしましても目標をへる。それにはをへてかういふ豪い人がある、お前達もさうなくてはならんといふ風に學校でも家でもへる。あの九神はよいお手本であるとひます。私共でも九神のを拵へて何かあれば家内中でむやうにしてゐる。之を一の目標にしてゐます。さういふ風に何か本當に目の前に子供にれい目標、ち九神なら九神を毎日んでゐると、だんだんするやうになる。さうする中に自然に國心といふものが出來ます。に九神は朝の子供で知らないものはないのでありますから、九神といへばピンとに來るとひます。私も毎日宮城のをつけやうとしたがどうも目標がないのでつてゐますと、山さんに倣つて服したのです。

嶋元　　鈴木君達の感想はどうです。

鈴木　　私は徴兵制度が發布された九日の午後七時ころ新聞を見たが、その時は新聞の字が見えない位に本當に喜しかつた。あの日の新聞を何回も讀返へしました。これで半島に生れ皇國臣民として畏れ多くも　天皇陛下から直接お召に與ることが出來るのだと思ふと、この時代に生れ斯様な皇恩に浴することの出來る自分達は本當に幸福者だと思ひました。自分達は仕事の上から絶へず兵隊さんに接する機會が多いので何時も戰陣訓を聞かされるので、その度に本當に一日も早く自分達も兵隊さんになつて志願兵や皇軍將兵と共に第一線に出られる日が來ないかと、それが待ち遠しく仕方がなかつた。そこへ徴兵令が發布されたのでとても嬉しかつたのです。その日友達と話合ひ、自分達の仕事、毎日習つてゐる技術を以て[必]ず航空隊に入つて御奉公する積りであります。今日は航空隊の強弱によつてその國の強い弱いが決るとまでいはれてゐる位であります。それで、この飛行機の重要性といふことは今度の大東亞戰爭においてもはつきり見られたのでありまして、我國は開戰と同時にハワイ大爆撃を敢行、瞬く間に戰果を舉げ、なほ南方においても到るところ大きな戰果を舉げてゐることを見ても、この空軍と言ふものがどんなに國家にとつて重要性を持つてゐるかと言ふことが明かであります。それでありますから私達も一日も早くお召しの早いことを望んでをるのであります。その日が來れば第一線に立つて一生懸命自分の技術を發揮して國家に盡したいと思つてゐます。

嶋元　　高山、丁字はなかなか青がんであるが、どんなことをやつてゐます。

高山　　私は昨年十月青を出ました。私は『海行かば』の通りを以て實行することを何よりの幸福かつ光榮とじたのであります。私はてより人でそれが出來なければになつてお國に盡したいとしてをるのでありますが、目下は百の員を務めてをります。今回の發によつてこの身體を國にげるのだと、友達ともり合つたことが々あります。又この發によりまして、半青年はすつかり肝玉を入れへまして日本人としてかしくないものになることが出來るとつてゐます。然しして半人にそれだけのがあるか何うかとしてをられる方もあるやうですが、そのは御安心ひたいとひます。くも明治大におかせられましては明治四十四年日韓併合の當時、朝治の御方をおしになりまして、大正昭和とおしの通りになつてをりまして、今日を以つて愈よこゝに内一の實を見ることになりました。ここにおいて我々も眞の皇國となつた以上、すつかり肝つ玉を入れへ、一意お國のため御奉する決心であります。

嶋元　　この兵令を實施してくれといふことを々いつてゐる人があるが、私は、等はさういふけれどもそのやうなを以ていふだけして半の青年をしてゐるのか、それをいふより先づに我々は斯のきを以てやつてゐるのであるといふことをすべきではないかと、いつたのであります。ろ山さんのやうに市井の青年をして行かねばならんとひます。日本人は兵令を布いて下さいなど、さういふことはれくていひ出すことは出來ないのであります。兵といふものは之は大元陛下よりぜられることであつて、我々國から要すべき合のものではない、そこをよくして本當の皇國となるならば自然決が出來るものとひます。これは者にした動を起さなければならんとひます。

夏山　　日本人になるといふことは非な大事だとへなければなりません。々と半人が本當の日本人になれるといふへは非な間ひであります。之には非な力とをしなければなりません。てをつては眞の日本人にはなれません。私はいつも青年にかういつてゐます。色々な場にして鍛へられてこそめてなれるのであつて一人一人が乃公は日本人になるんだといふ決心を持たなければ出來ない大事です。それには耐と力とがなければなりません。日本人になれるといふへ方はいけない、日本人には三千年ののが流れてゐるのでありますから、さう簡に行くものではない。半人はもつと力しなければいけない。日本の中にあるその目といふものをへるならば自らそれにつてを以て實しようといふ氣持にならなければなりません。

今實際その氣持になつてゐることは事實であります。今のお話のやうに徴兵令を布いてくれという要望はなかつた、布かれるのが當然といふ状態にあつた。それでありますから教育の問題でもその通りであります。布いても差支へないと言ふことになれば要望がなくても布かれるのである。それには布いても差支へないと言ふ狀態になることが肝要であります。さうすれば問題は自ら解決するのであります。本當の日本人になるやう努力しなければならんと思ひます。

嶋元　　どうも長い時間、大變よい話を承りまして有難う御座いました。（1942年5月17日）

1. 『京城日報』1942年5月14日から17日まで連載。座談会は5月12日に京城日報社貴賓室で開催。適宜、句読点を補充した。 [↑](#footnote-ref-1)